

Liberian Stories

リベリア：暴力と避難の連鎖の中で



モンロビアの避難生活者、2003年6月
写真提供：TeunVoeten、ヴァニティーフェア誌

Liberian Stories

リベリア：暴力と避難の連鎖の中で

無差別の暴力、略奪、レイプ、強制徴兵、一家離散、そして混乱の広がり、10年以上もの間リベリアの人々の日常生活の一部となっている。すでに数え切れないほど出ている一般市民の犠牲に加え、現在生じている戦闘により、何十万もの人々が戦闘地域からの避難を余儀なくされている。2003年6月までに、10万人のリベリア人が国内で避難民となった一方、15万人が保護を求めて隣国のシエラレオネ、ギニア、コートジボワールに向かったと推定されている。

反政府勢力と政府軍が交互に領土を占領し、失い、また占領するという戦闘パターンが展開されてきた。そのため人々は何度も逃げ出さなくてはならない。彼らは、わずかな食糧しか得られず、医療もまったく受けられない森の中に避難場所を探すか、常に移動する戦線から少しでも遠くの町へ逃げるしかない。リベリア西部が徐々に反政府勢力の制圧下に置かれるにつれ、多くの人々が首都モンロビア方面に逃げざるをえなくなっている。何千人もが行く場所もなく、一時しのぎのキャンプで生活している。しかし戦闘がモンロビア周辺に近づいてくると、今度はこれらのキャンプが攻撃され、森の中へ、あるいはモンロビアの市街地へ、そして隣国との国境へと、人々はまたも逃げ出さなければならないのである。

安全な場所を求めても、多くのリベリア人にとって選択の余地はほとんどない。国内で移動し続けるにしても、他国への脱出を試み難民として生きるにしても、そこでの安全はたいがい長続きせず、保障もされていない。いずれの道を選択しても、その途中で彼らは暴力や強奪にあい、略奪やレイプ、強制的な徴兵、あるいは死の危険に直面する。たとえ彼らが国外に逃れても、どの国に到着したかによるが、母国に強制送還されたり、難民キャンプの中でさえ戦闘員として徴兵されたりする危険がある。比較的安全な難民キャンプにたどり着いた人も、食糧不足、不衛生、性暴力の頻発する劣悪な条件下で生活していかなければならない。

国境なき医師団(MSF)は医療団体として、リベリア国内の避難民だけでなくシエラレオネ、ギニア、コートジボワールに逃れた難民とも緊密に接している。MSFのスタッフはその活動を通じて常に彼らと会話し、彼らからの話を耳にしている。この報告書は、非人間的な状況下で安全を見つけ出し、どうにか生き延びようとする彼らの長い苦闘を明らかにすることを目指している。ここに描かれているのは、生まれ育った場所でトラウマを負い、そして逃れる間にもさらなる暴力を受け、様々なキャンプで引き続き困難な生活を送っている人々の物語である。

リベリアの内戦は、1980年代後期、チャールズ・テイラー率いるリベリア国民愛国戦線（NPFL）がサミュエル・ドー大統領の専制政治に対し反乱を起こしたことに始まる。その後1989年から1996年までの紛争により、人口わずか300万人と見られるこの国で、少なくとも8万人以上もの命が奪われたと推定されている。

短い比較的平和な時期の後、1999年、新しい反政府勢力、「リベリア和解民主連合」（LURD）がチャールズ・テイラー大統領の政権転覆を企てて隣国ギニアからリベリアに入国し、戦闘が再び始まった。

町や村を攻撃し、LURDはリベリア北西部を掌握していった。彼らがロファ州に侵攻していくにつれ、攻撃そして略奪という戦闘パターンが出現し、町々はまずLURDに、その後政府軍に攻撃された。反政府勢力、政府軍のいずれも新しい領土を長く保持することはできず、戦線はしばしば移動した。これによりロファはある種の無人地帯と化し、人々は3年以上もの間必要不可欠な人道的援助を受けられない状態にあった。2002年になると、ボミ・ヒルズやグランド・ケープ・マウント州へのLURDの攻撃により、戦闘地帯はリベリア西部の大部分に拡大していった。

2003年初め、2つ目の反政府勢力、「リベリア民主運動」（MODEL）が出現した。LURDが北部地域を掌握する一方、MODELは国の南東部で力を得ていった。現在両勢力は、反テロリスト部隊（ATU）、リベリア政府軍（AFL）、特別安全保障機関（SSS）、特殊作戦部隊（SOD）やその他数多くの民兵集団を含む、テイラー大統領の様々な軍隊と権力闘争を続けている。過去数ヶ月にわたって繰り広げられた残虐な戦闘でますます多くの犠牲者が出ているだけでなく、政府軍、反政府勢力双方による人権侵害が広範に行われている。殺人、レイプ、強制労働、略奪、若者の強制徴兵が横行している。さらに、何千人もの人々が国を離れて他国へ避難することもできない状態となっている。

2003年6月、反政府勢力は首都モンロビアを2回にわたり攻撃した。この2回の攻撃とその後の戦闘により市は混乱状態に陥り、何千人もの人々が家を離れ、放棄されたビルやサッカー場などへの避難を余儀なくされた。交差射撃を浴びたり、迫撃砲やロケット弾に撃たれ、何百人もの一般市民の犠牲者が出た。約600人が死亡し、1,000人が負傷したと見られている。反政府勢力と政府軍による家屋や店舗、病院、医療施設の大規模な略奪が戦闘に無関係な人々の苦しみをさらに増幅した。

現在機能している公立病院はリベリア全土に一つとしてない。保健医療システムが麻痺状態にあ

る中¹、コレラの流行、栄養障害の拡大に早急に歯止めをかけなければならない。6月の戦闘の余波が続く中、MSFは1週間に平均350人のコレラ患者の治療に当たっているが、重度の栄養障害患者が急激に増加しており、特に5才以下の子ども達は深刻な状態にある。

国際社会のリベリアへの介入が検討されているが、紛争当事者の責任は免れ得るものではない。当事者には一般市民の権利を尊重する義務があるにも関わらず、リベリアでは正反対のことが行われ、人々の権利が日常的に侵されているのである。

これ以上の回避可能な犠牲を防ぐため、MSFはリベリアの紛争当事者である政府軍、反政府勢力に対し、以下を要求する。

- いかなる状況においても一般市民を人道的に扱い、無差別の殺戮、性暴力、略奪、強制徴兵をやめ、
- 生きるために必要な食糧や医療などの基本的サービスおよび生活必需品を、一般市民が安全に入手できるようにし、
- リベリアの全ての地域で、人道援助団体が安全に一般市民への援助を行えるようにし、
- すべてのリベリア国民が国外へ出る権利を保障すること。

MSFはリベリア難民を受け入れる国に対し、以下を要求する。

- 国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の支援とともに、リベリア難民に対し引き続き保護と援助を提供し、
- 安全を求めて国外脱出をはかるリベリア人に対し、国境を開放すること。

国境なき医師団

モンロビア・ブリュッセル、2003年7月

¹現在リベリアで登録されている医師は32人、看護師は185人

目次

1. 家を追われて：避難の背景	p. 5
2. 路上で：隠れているあいだと避難中の危険	p.13
3. キャンプからキャンプへ：続く避難生活を生き抜く	p.19
4. まとめ	p.25
添付1 リベリアの地図	別紙
添付2 この地域における MSF の活動	p.27

サラ、36 才、ボミ州出身。2003 年 6 月 23 日のインタビューの時、彼女はモンロビア北部近郊の Plumcor キャンプで生活していた。その翌日 2 回目の反政府勢力の攻撃により、キャンプで生活していた人々はまたも逃げ出さざるをえなくなった。

「以前、私は Klay という町の市場の露店で洋服を売っていました。15 年もその仕事をしていたのです。去年反政府勢力がクレイを攻撃した時、私は母と子ども達と逃げ、徒歩でポー川へ向かいました。途中、政府軍の兵士達に持ち物を調べられ、お金は全部取られてしまいました。彼らはほとんどの人に同じことをしていました。私は 2,800 リベリア・ドルを取られました。私が商売で貯めたお金の全てです。

その後、反政府勢力がポー川を攻撃したので、私達はまた逃げ出し、この Plumcor キャンプにやって来たのです。私の母はあの銃撃戦で心に大きな傷を負いました。私達は 2003 年 2 月 19 日にこのキャンプにたどり着きました。

2 週間前に、反政府勢力がこのキャンプに入ってきました。銃声を聞いて、私達は何も持たずに逃げました。沼地に向かって走り、沼を渡ろうとしました。でも渡りきれずに亡くなった人もいました。その中には子どももいます。沼を渡ろうとしている間に、私は娘を見失ってしまいました。私の甥っ子は流れ弾に当たり、即死しました。まだ 13 才でした。その弾が政府軍が撃ったものなのか、反政府勢力が撃ったものなのかはわかりません。

私達は森の中に隠れていましたが、その後ある村に行き、そこで眠りました。でも戦闘がどんどん近づいてくると、その度に村から村へと逃げ続けなければならず、最後にはデュアラ(モンロビア北部)まで行きました。

デュアラに着くと、もう移動することができず、戦闘が終わるまでそこに留まらなければなりません。戦闘は日曜から木曜まで続きました。私達は知らない人の家に隠れ、そこから出られません。ですから、食べ物も水も手に入れることができなかったのです。そのうち近所の人々が水をくれましたが、4日間も何も食べる物がなかったのです。

戦闘が終わった時、私は娘を見かけなかったかと、家々を尋ねて回りました。ようやく私は娘を学校の建物の中で見つけました。誰かが娘と一緒に連れて来てくれたのです。結局娘は6日間も行方不明でした。でも娘が元気で傷つけられていなかったことは、本当に有難いことです。

私は母と娘を町に残し、先週このキャンプに一人でやって来ました。ここに来て、私は兄弟の2人に会うことができました。でも家の中のものはすべて略奪され、私達にはほんとうに何も残っていません。配給される食糧もなく、食べ物を買うお金もありません。人がくれるものしかないのです。逃げ回ってばかりで、私はもうくたくたです。」

1. 家を追われて：避難の背景

1999年、リベリア北西部で内戦が再び勃発し、何十万もの人々が避難することになった。彼らは特定の民族、部族、階級や宗教グループに属しているわけではなく、あらゆる階層、年齢、信条の人々である。農民であり、看護師、ビジネスマン、学校の生徒、商人、大学生、政府職員であり、そして年老いた人々である。生命の危険を感じ、人々は皆、住む家を離れざるをえなくなったのだ。

村や町を反政府勢力に攻撃され、多くの人々が住む家を追われた。そして残った人も、政府軍が領土の奪還をはかり反撃を始めると逃げ出すことになった。両紛争当事者による攻撃は常に暴力的で、一般市民に多くの死者、負傷者を出し、家々を破壊し、広範な地域をパニック状態に陥れた。

「2月に攻撃が始まった時、私は家族と一緒に市場にいました。彼らは銃を宙に向けて撃っていました。人々の持ち物を奪い、車を燃やし、そして私の16才の妹を連れ去りました。叔父は銃撃戦で亡くなりました。家族の他の者はその場から逃げ、私も妻と4人の子どもと逃げたのです。」

国内避難民の男性、30代半ば、Plumcor キャンプ

「反政府勢力がやって来て町を攻撃した時、私達は森の中に逃げ込みました。2週間後に今

度は政府軍が来て、町を奪還しました。彼らはたくさんの建物を焼き、たくさんの人々を殺しました。2001年7月のある夜、Kolahun でのことです。政府軍が来て町を占領しましたが、たくさんの人が戦闘に巻き込まれました。私の姉は殺され、父も逃げようとしていた時に殺されました。その日何人が亡くなったのか、私にはわかりません。でもたくさん、非常にたくさんの方が亡くなりました。」

難民男性、バンダジュマ・キャンプ

「反乱軍がロファに侵入してきた時、政府軍、反政府勢力、両方によって多くの殺人が行われました。私の兄弟も殺されました。多くの方が森の中に逃げ込みましたが、ギニアやシエラレオネまでたどり着けた人もいました。私は妻と母、子ども達と一緒にモンロビアを目指すことにしました。しかしたどり着いたものの、生活は非常に困難でした。」

難民男性、バンダジュマ・キャンプ

通常、攻撃は何の警告もなく、時には夜間に行われる。多くの場合一般市民はどの方向から銃が撃たれているのか分からず、そのため安全を求めてどの方向に逃げればいいのかも分からない。その結果、交差射撃から脱出しようと試みる間に、多くの方が負傷、あるいは死亡することになってしまう。

「攻撃は夜間に行われました。労働者の多くが殺害されました。私のまだ2才の娘も殺されました。皆が逃げ惑っていました。後には何も残りませんでした。」

難民男性、32才、Gondama キャンプ

「グランド・ケープ・マウントの市場で、突然の攻撃がありました。私の父は銃撃戦で殺されました。」

国内避難民の男性、30代半ば、Plumcor キャンプ

「Kolahun は市の開かれる月曜の早朝に攻撃を受けました。町は包囲され、彼らは宙に向けて銃を撃つと、その後家々に向けて撃ちました。1発の砲弾は町の中心、真っ只中に撃たれました。私は7才と10才の2人の子どもと一緒にベッドで寝ていましたが、即座に子どもと森に逃げ込みました。人々はあらゆる方向に逃げていました。森に逃げた後、私は母と妻が殺されたことを知りました。2人は攻撃の時、町の中心部にいたのです。」

難民男性、50才、Tekoulo キャンプ

一般市民が無差別に銃撃された攻撃について語る人もいる。また、反政府勢力は宙や地面に向けて銃を撃ったという人もいる。

「彼らは激しい銃撃とともにやって来ました。逃げる事ができたとしたら、それはまさに神様のご加護のおかげです。彼らは無差別に撃ちました。そして住民の家まで来ると、すべてを略奪したのです。」

難民男性、35才、Gondama キャンプ

「政府軍は道路沿いの村の人々を攻撃し、略奪しました。人々に向けて銃を撃ち、中には全住民が殺害された村もあります。」

シエラレオネ人女性、以前は難民としてリベリアに住んでいたが現在は帰国

「病院で働くため、私はグランド・ケープ・マウント州へ派遣されていました。6月20日、銃声が聞こえた数秒後、いたる所で散発的な銃撃が起きました。人々があわてふためいて町を逃げ惑うのを見ました。その後、反政府勢力が診療所に入って来ました。宙に向けて銃を撃っていました。人々に危害は加えませんでした。私は彼らが人を殺したり、傷つけたりするのは見ていません。診療所に来た時、一般市民を捜しに来たのではないと、彼らははっきりと言ったのです。兵士を捜しているだけだと。しばらくすると、彼らは看護師を4人連れ去り、薬品もいくらか持って行きました。反政府勢力は立ち去る際に私達に、ここにはいけない、リベリアを去るべきだと言いました。」

難民男性、Gondama キャンプ

「去年の7月、私はグランド・ケープ・マウントの我が家を後にしました。私達の町の市場が攻撃され、皆あらゆる方向に逃げていました。反政府勢力は地面に向けて撃っていました。」

国内避難民の女性、20代前半、Plumcor キャンプ

家族で攻撃から逃れる際、パニックの中でしばしば子ども達は親と離ればなれになってしまう。

「2週間前に攻撃を受けた時、私の8人の子どもはそれぞれ別々の方向へ逃げました。2才の娘は長い間病弱だったため、私は娘を抱えて沼地を渡らなければならず、子ども達全員と一緒に連れていくことができなかつたのです。逃げ回る生活が続く中で、2才の娘の病状は悪化し、その後亡くなりました。今は3人の子どもがここに一緒にいます。でも娘の死後、

私は他の5人の子どもを捜し出す力も失ってしまいました。5人は今も行方不明です。ここには他に家族もいないので、5人を捜しに行ってくれる人もいません。」

国内避難民で妊娠中の女性、42才、Plumcor キャンプ

「2週間前に反政府勢力がキャンプに侵入しました。銃声を聞き、私達は逃げました。沼地を渡ろうとしていた時、娘が行方不明になりました。戦闘が終わると、私は家々を回り、娘を見かけなかったか聞きました。ようやく学校の建物の中で娘を見つけましたが、娘は6日もの間行方がわからなかったのです。」

国内避難民の女性、30代半ば、Plumcor キャンプ

人々はまた逃げ回る中で、夫、妻、子ども、親とも離れ離れになる。多くの人が再会できないままである。

「反政府勢力の攻撃を受け、皆が違った方向に散り散りになりました。夫の身に何が起きたのか、私には分かりません。私は8人の子どもと逃げて来たのです。」

妊娠5ヶ月の国内避難民の女性、Plumcor キャンプ

反政府勢力、政府軍の攻撃にはしばしば性暴力が伴う。女性や少女は家族から引き離され、兵士と行動を共にすることを強られる。このような問題を人前で話すことは非常に辛いことであり、時にあいまいな形で報告されているが、インタビューを受けた人の証言はレイプや性暴力が日常的に行われていることを強く示している。

「反政府勢力が私の16才の妹を連れ去り、彼女からの連絡はまったくありません。妹は今もボミ州で反政府勢力と一緒にいると私達は思っています。他にもたくさんの少女が連れて行かれました。」

国内避難民の男性、34才、Plumcor キャンプ

「反政府勢力は私の19才の妹を連れ去り、もう妹は帰らないと私に言いました。それ以来、妹に会うことも、連絡を受けることもありません。」

国内避難民の男性、36才、Plumcor キャンプ

「兵士達は路上でレイプをしていました。」

難民女性、25才、Jimmi Bagbo キャンプ

「私と友達は兵士達に捕まりましたが、私達4人は逃げることができました。逃げ出す前のある晩、私は兵士と一緒にいました。混乱の最中に私達は逃げ出しました。彼らは銃を撃ってききましたが、当たらずにすみました。森の中に逃げ込んだのです。そこに3日間いた後、私はSinjeに行きました。」

難民女性、26才、Gerihun キャンプ

反政府勢力が徐々にリベリア北西部を掌握していき、戦闘がグランド・ケープ・マウント州やボミ州に拡大していくにつれ、近い将来自分の地域も攻撃を受けるのではないかと不安から、ますます多くの人々が家を離れるようになっている。

「以前はボミ州に住んでいました。農業もしていましたが、私は教師としても収入を得ていました。戦闘が近づいていることを聞いて、2002年4月10日、家を後にしました。戦闘が迫ってくるまで待たず、車に乗って、モンロビア方面を目指し、戦闘を避けようとしたのです。私と妻、3人の子ども、父と母が車に乗り込みました。」

国内避難民の男性、Plumcor キャンプ

反政府勢力の攻撃の後、不可避免的に政府軍の反撃が行われるという、ほとんど絶え間のない戦闘パターンが出現すると、町への反政府勢力の攻撃をなんとか生き延びた人々さえも、しばしば政府軍が反撃する前に住んでいた家を離れる決意をする。この混乱した状況は、しばしば政府軍が人々を家から離れさせる目的で、反政府勢力の攻撃がせまっているという噂を故意に広めたため、さらに悪化することになる。このようにして、政府軍は広範に金品の略奪をする機会を得るのである。

「反政府勢力が出て行った後、次には政府軍が来て略奪を繰り返すのではないかと心配していました。彼らに何をされるかわからず、恐れていたのです。」

難民男性、Gondama キャンプ

両軍間の緊張が高まると、反政府勢力に占領された地域の住民は、反政府勢力を支持したとして次々と政府軍に非難された。反政府勢力による最初の侵攻が行われたロファ州出身の男性は特にその犠牲となり、彼らの多くがリベリアからの脱出を試みた。ロファからモンロビアに移動した人でさえ反政府勢力を助けたとして告発され、暴力的な扱いを受けた。

「ロファ出身であったため、政府軍兵士は私達が LURD を支援したと言い、私達を殺すと脅しました。」

難民男性、バンダジュマ・キャンプ

「私は細心の注意をはらって、移動を続けなければなりません。この戦争を起こしたのは私の部族だと人々が噂していたため、私は危険を負っていたのです。町中でも政府軍は私に対し非常に攻撃的でした。『お前の兄弟達が戦争を起こしたのだ。だから、お前らをアリののように踏み潰してやる』というようなことを、彼らに言われました。」

難民男性、バンダジュマ・キャンプ

「大統領はロファの人が戦争を誘発したと告発し、反政府勢力の侵攻を助けたとして私達は強く非難されました。私達の部族の者を殺せとの命令が出されたため、私達は森から森へと逃げ回りました。私達は不安の中で生き続け、大変な苦しみを味わいました。」

難民男性、Gondama キャンプ

戦闘グループによる年若い少年の**強制的な徴兵**が広範に行われたため、多くの親は子どもを国外へ脱出させた。少年がかり集められると、銃を与えられ戦闘に参加させられたという報告が数多くされている。時にはまだ 10 才程の少年は、概して麻薬常用者にさせられ、その影響で殺人やレイプのような残酷な行為を犯してしまう。

「ぼくは 14 才です。モンロビア出身で、学校に行っていました。2002 年 3 月 1 日にモンロビアを後にしました。戦争が近づいてきたので、お父さんにモンロビアを離れるように言われ、難民キャンプに来ました。お父さんは、僕がまだ若いので心配したのです。彼らは若い人を捜して、兵士にさせるからです。」

難民の少年、14 才、Gerihun キャンプ

「モンロビアにいた頃は、私はまだ学生でした。若い兵士の召集が始まりました。ある日、私が自宅近くでサッカーをしていると、車が道路の近くに駐車しました。兵士達が出てきて、グラウンドに近づいて来ました。私はとても怖くなり、走り出しました。シエラレオネへ行くことに決めたのです。」

難民男性、18 才、Gondama キャンプ

若い女性が入隊を強制されることもある。

「リベリアでは、少女や少年も戦うことを要求されました。町中で攻撃を受けた時、私は兵士ではないと言いました。そこから離れるときは恐ろしかったです。彼らは私を追いかけ、兵士になれと強要するのですから。こんなことは日常茶飯事です。表にいる人は連れて行かれ、兵士になることを強制されるのです。彼らは軍隊でもあり、民兵でもあるのです。少年を連れて行くのです。小さな少年を。そして彼らに戦う術を教えるのです。」

難民女性、25 才、Jimmi Bagbo キャンプ

戦闘が迫るにつれ、交戦地帯に住み続ける人々の状況はさらに悪化している。2000 年以降、援助活動従事者はリベリア全土の 4 分の 3 の地域に行くことができないでいるが、2003 年にそういった地域からシエラレオネに来た避難民の話では、そこでの**食糧不足は深刻で、病人は医療を受けられず、薬も完全に欠如している**ということだ。

「私はロファ州に住んでいました。3 才の孫娘の病気がひどく、ここに来ました。私達は長い間森に住んでいましたが、食物も薬も全くありませんでした。娘が食物を運んでくれましたが、先週からひどい咳をするようになりました。孫娘の咳はますますひどくなり、まっすぐに立っていることができません。私達は、ここに着くのに 3 日歩きました。私達がいた地域には病人が多くいましたが、食物はありませんでした。ただ、ひどい病気の人のみ境界を越えてシエラレオネに入るのを許可されていました。」

初老の女性、ズインミ中継地点

2003 年初頭から、約 1 万人がリベリアとシエラレオネまたはギニア間の国境を越えた。到着した人の報告によれば、悲惨な状況のため、さらに多くの人々が避難しようとしているが、紛争当事者によって阻止されているという。反政府勢力が、人々が村から避難するのをあからさまに禁止したり、故意に阻止したりすることもあれば、両戦闘勢力に挟まれてどちらにも逃げられない状況に陥ってしまうこともある。

アンナ (27 才) は MSF と話をした 2003 年 6 月 23 日、モンロビアの北に位置する Seigbeh キャンプで暮らしていた。

「1990 年に戦争が始まった時、私は 14 才でした。NPFL の兵士が私の村に来て、私の保護者は誰かと聞きました。両親が自分達の娘だと言いました。すると兵士は私を妻に迎えたいと言い出

しました。私の母は拒絶し、娘を軍隊に入れるつもりはないと言いましたが、兵士は力づくで私を連れだし、一日中私を強姦しました。私はひどい怪我を負い、内臓が膣を介して傷つき始めました。男は私を1週間拘束した後、家族の元へと返しました。

1994年、私は祖母を連れ、モンロビアからボミ州へと向かいました。検問所に着いた時、兵士は少女達を他の人々から引き離しました。私達は逃げましたが、夜になると軍隊は懐中電灯を使って私達を見つけだし、橋の下のマットレスがある場所に連れて行きました。3人の男が私を強姦しました。翌日、私は歩くことができませんでした。

それ以来私は胃から足までの全体に激しい痛みをおぼえ、何もすることができませんでした。再び月経が開始してから1年ですが、激しい痛みを伴います。私は妊娠することができない体になってしまいました。だから子どもはありません。周りの皆には幼い子どもがいます。でも私は生むことができないのです。去年、健康診断を受けた時、子宮に障害があると言われました。けれども私には手術に必要なだけのお金がありませんでした。

私はお金を得るために料理を始め、4,000リベリア・ドルを蓄えました。けれども、反政府勢力の攻撃後、ボミからここへ避難しなければならず、お金は世話をしている母に渡しました。母は路上でお金を奪われ、私のマットレスや衣服も取られてしまいました。私には今何もありません。

一昨日(2003年6月21日)、私は薪を探すために森に行きました。政府軍兵士が3人いて、銃を持っていました。一人が私を見て言いました。「どこへ行くんだ」、私は薪を探していると言いました。そして彼は言いました。「おまえは一日俺に付き合うのだ」。私は恐怖におののきました。彼は私を森の奥深くへと連れ込み、服を脱がせました。そして強姦しました。その後私が服を着ると、彼は私から50ドルを取っていきました。私はキャンプに戻りましたが、昨日は1日体調が悪かったです。お腹がひどく痛むのですが、治療を受けるお金もありません。」

2. 路上で：隠れているあいだと避難中の危険

悲惨な状況が続き、将来の改善も期待できない。そんな時にはあらゆる機会をつかんで避難することが唯一の選択肢である。

村への攻撃の間、人々は恐怖におびえ、あらゆる方向に逃げだす。多くの場合、人々はまず森に走り込む。それからある場所に隠れるか、発見されないよう移動する。森に何ヶ月も隠れる人も

いる。自宅に戻るのが恐ろしいが、他に向かうべき安全な場所がないためである。

通常自宅から逃げる際には財産やバック食品を持ち出す時間がないため、人々は森に隠れている間、衣服をほとんど持たず、採集できるもので飢えをしのご。手に入る食料といえば主にヤムイモ、バナナ、キャッサバしかなく、人々は**激しい飢え**に苦しんだ。

「反政府勢力が町の人に暴力をふるっていたため、私は3人の子どもと一緒に3ヶ月森にとどまりました。見つけられた食料といえば主にキャッサバ、森のヤムイモだけでした。」

難民男性、30代半ば、Jimmi Bagbo キャンプ

「2001年2月2日、反乱軍が再びヴォインジャマ市を攻撃したため、私達は財産全てを残して命からがら避難しました。森のなかで何ヶ月も、食物もなく、ヤムイモばかり食べて過ごしました。」

難民男性、70才、Jimmi Bagbo キャンプ

「攻撃があった時、私は森に走り込み、隠れました。私達は2週間そこで過ごしましたが、食べられたものはキャッサバだけでした。」

国内避難民の若い女性、Plumcor キャンプ

医療が受けられず薬も手に入らないため、人々は病気にかかり、命を落とす人も多くでる。

「私はボミ・ヒルズから来ました。私は家族とともに暮らしていましたが、今は離れ離れになっています。私は学校に通っていました。私は家族や友人と一緒に幸せに暮らしてました。去年、激しい攻撃があり、皆が森に隠れました。私は3日そこにいました。子ども達は死にかけていました。私達は空腹で、病人もいました。私の父は死にました。」

難民女性、26才、Gerihun キャンプ

「反政府勢力が町に来たため、私は家族とともに森に逃げ込みました。私達には薬もなく、死んでしまった人もいました。マラリアで死ぬ人が多く、看護する人もいませんでした。」

難民男性、30代半ば、Jimmi Bagbo キャンプ

森にとどまらず、徒歩や車で国境へ向かい、ギニア、シエラレオネ、コートジボワールなどで難民として暮らそうとする人もいた。またリベリアの他の地域に移動し、親戚と住んだり、別れた

家族を探す人達もいた。2002年と2003年、多くの人がモンロビアへと向かい、その周辺のキャンプに住むこととなった。戦線が政治権力の中核へと近づくにつれ、キャンプからキャンプへと何度も避難することが多くなった。

どの進路を取ろうと、避難の途上にある限り、**再び暴力の犠牲になる**場合が多い。避難の間、人々は様々なことに苦しめられる。財産は盗難にあい、強姦、強制的な徴兵、強奪の危険にさらされるのである。彼らは暴力にあうことを恐れて、日中を避け、夜間に移動することが多い。

途中で攻撃を受けた際の大混乱のさなかに殺された家族について語る人もいる。

「私はモンロビアから来ました。私の子ども達はそこにいます。私の夫はシエラレオネへ行く途中に殺されました。市外の道路での攻撃のさなかでした。私達は攻撃の間逃げ続けました。そして夫を見失いました。私は夫の遺体も見ることができませんでした。彼の遺体を見た友人から、死んだことを聞きました。」

難民女性、41才、Gondama キャンプ

また反政府勢力と政府軍との戦闘に**巻き込まれ**、困難な地形を横切って逃げようとした人が、流れ弾や迫撃砲の破片によって怪我をしたり、命を落としたりすることもあった。

「私達は沼地へ走り、渡ろうとしました。けれども、沼地を横切ってわたれない人もいました。その中には子どももいました。私が渡ろうとしている間に、娘が行方不明になりました。流れ弾が兄の息子に当たり、彼は即死しました。13才でした。」

国内避難民の女性、30才、Plumcor キャンプ

「2週間前、激しい戦闘があり、反政府勢力がこのキャンプに来たため、私達は沼地に逃げました。私は2人の子ども、母、祖母といました。私達が沼地を渡ろうとしていた時に激しい銃撃がありました。体が弱くて病気だった祖母は深みにはまってしまい、助け出すことはできませんでした。私達は祖母を残して逃げねばなりませんでした。兄は祖母を探しに行きました。昨日、遺体が沼地で見つかりました。」

国内避難民の女性、20才、Plumcor キャンプ

「銃撃が始まったので、私は沼地を通り抜けました。私には5人の子どもがいたので、渡るのはとても困難でした。」

国内避難民の女性、40 才、Plumcor キャンプ

とりわけ男性は、政府軍または反政府勢力とともに戦うことを強制される恐れがある。

「私は移動中、2 人の兵士に出会いました。彼らは私にお金を渡すように言いました。兵士は私を何度も殴った挙げ句、略奪し、道に置き去りにしました。その後、彼らは私について来いと言いました。他の人は、もし従わなければ自分達が殺されるから、ついて行ってほしいと私に頼みました。」

難民男性、37 才、Gerihun キャンプ

ほとんどの人が移動中、兵士達に**お金や財産を奪われた**と述べている。こういったことは検問所で頻繁に行われている。そこでは職権濫用や強奪が習慣となっているのだ。

「途中、政府軍兵士は私を調べ、持っていたお金のすべてを奪いました。兵士達は他の多くの人にも同じことをしていました。彼らは私から 2,800 リベリア・ドル²を奪っていきました。私が稼いでためたお金の全てでした。」

国内避難民の女性、31 才、Plumcor キャンプ

「私は 8 才になる子どもとともに避難しました。移動中、兵士から嫌がらせを受け、衣服やお金を奪われました。」

国内避難民の妊婦、Plumcor キャンプ

シエラレオネやギニアとの国境を越えるには、通常多額の金銭が要求される。人々が国境通過点にたどり着く頃には、価値あるものを何一つ所有していないことが多い。それでもやはり、**逃るためには金銭を払わねばならない**のである。金額は通過点によって様々である。

「私達が国境についた時、リベリア兵士にお金を払わなければなりませんでした。私は 30 リベリア・ドルを払いました。お金を持っていなければ、衣服でも何でも奪われてしまうでしょう。何も持っていなければ、国境を越えることはできないでしょう。」

難民女性、26 才、Gerihun キャンプ

² 1000 リベリア・ドル=14 ユーロ

「私達がボに到着し、Gendema へと国境を越えようとしたところ、150 リベリア・ドルを要求されました。けれども、私は交渉して 125 ドルに下げさせました。150 ドルは私達が持つ全財産だったからです。私の妻は泣いていました。どうすればいいのかわからなかったのです。皆が空腹でした。」

難民男性、バンダジュマ・キャンプ

兵士が民間人に商品を運ばせるなど、仕事を強制して「支払い」をさせる場合もある。国境を越えるために、兵士とのセックスを強制された女性からの報告もある。

「私はリベリア人避難民で、Kolahun の町から来ました。家族は 7 人でしたが、4 人を町に残してきました。なぜなら、ギニアへと国境を越える際に反政府勢力に払わねばならない通過料、50 リベリア・ドルを持っていなかったためです。それを払えなければ、頭の上に荷物のせて 100km を超える道程を徒歩で運ばねばならないでしょう。残してきた家族は年をとっているため、頭の上に重い荷物をのせ、長距離を歩くことはできませんでした。

リベリアを出る決心をしたのは、反政府勢力が私を殴り、彼らのために無償で働くことを強制したためです。本当に長い距離を頭の上に弾薬箱をのせて運ばなければならなかったのです。疲れていると不平を言えば、殺されます。私の友人の 1 人はそれで死にました。」

難民男性、23 才、Tekoulo

「私達は Gendema で国境を越えました。国境でお金を支払わねばなりませんでした、問題はお金でなく、命でした。LURD は私達に荷物の運搬を強要しました。従わなければ殺されていたでしょう。私達に権利はないのです。女性なら強姦されるでしょう。従わなければ殺されるのです。」

難民男性、32 才、Gondama キャンプ

移動中に生じる戦闘に起因する危険に加え、人々は長旅による肉体的ストレスに耐えなければならぬ。子どもや所持品を運ばなければならなかったり、負傷した体で、食べ物もない状態で何日も歩かねばならないからである。

「避難の後には、病気になってしまいます。私は今、栄養失調だった子どもを埋葬してきたところです。」

国内避難民の男性、33 才、Plumcor キャンプ

とりわけ雨季の間は、厳しい地理条件により危険がさらに増し、川や沼地で多くの人が無駄に命を落とす。リベリアとその近隣諸国を隔てている川を越えようとして水死してしまった人の話は、子どもの場合も含めて頻繁に耳にする。

なんとか国境に達することができたとしても**通過を拒否されたり**、通過できたとしても**強制的に送り返される**場合がある。

「若い人がギニアとの国境を越えることは不可能です。反政府勢力によって拒否されるからです。村へと戻り、彼らのために仕事をしなければならないのです。お金を支払うか、仕事をするか、どちらにしても彼らのためになる存在にならなければなりません。年をとっているか病気の人だけが国境を越えることができます。」

難民男性、50才、Tekoulo キャンプ

「ギニアとの国境を越える許可を得るために250 リベリア・ドルを支払いました。国境を越えたところでさらに選別が行われ、20才と25才の息子は入国を拒否され、反政府勢力のいる側へ送り返されました。私は今、14才と10才の娘とともに難民キャンプにいます。攻撃の間に死んだ夫、どこにいるかもわからない2人の息子を思って毎晩泣いています。」

難民の母親、45才、Tekoulo キャンプ

「若い男性は Tekoulo キャンプには到着できません。袋を運ばされて国境のこちら側に着けば、また別の袋を持たされて送り返されてしまうからです。拒絶すれば、激しく殴られます。」

難民女性、60才、Tekoulo キャンプ

ジェームズ(30才)は、シエラレオネのバンダジュマ・キャンプに住むリベリア人難民である。2003年6月11日にMSFのインタビューを受けた。

「私はロファ州の Masambolahun 村に住んでいました。反乱軍が来て町を攻撃し始めたので、私達は森に逃げました。2週間後、政府軍が来て町を奪還しました。政府軍は多くの建物を燃やし、殺人を犯しました。軍隊は人々が森に隠れていることを知り、町へと戻るように言いましたが、人々はおびえ、多くの人々が逃げ出して Kolahun へと向かいました。」

2001年7月のある夜、Kolahunに政府軍が来て町を占領し、多くの人が戦いに巻き込まれました。私の姉が殺され、逃げようとした父も殺されました。その日にどれだけの人が亡くなったかは覚えていませんが、本当にたくさんの人でした。

私はGbangaへ行き、他の家族を見つけることを決心しました。非常に慎重に移動しました。私の部族が戦争を引き起こしたと言われていたからです。学校時代からの友人に会い、彼らがモンロビアなら大丈夫だと言ったので、そこで職探しを始めました。薬局に職を見つけた2ヶ月後、妻と子どもを呼び寄せました。

けれども、町中の政府軍は私に対して非常に攻撃的でした。彼らはこんな風に言いました「おまえの仲間が戦争を引き起こしたんだ。蟻のようにおまえを押しつぶしてやるぞ」。私は心底思い悩み、最終的に薬局の主人に言いました「逃げたいです。ここで生きていけそうにありません」。彼は資金として2,000リベリア・ドルを渡してくれました。

私達はドゥアラへ行き、タクシーを拾いました。私には3人の子どもがいました。運転手は子どもは2人しか乗せられない、3人目は追加料金を払えと言いました。モンロビアからボまで150ドルを請求されました。モンロビア北部のアイロン・ゲート検問所に着くと、兵士達はどこへ向かうのか聞きました。私は難民キャンプの親戚を訪ねに行くと言いました。彼らは私の身分証明書を没収し、通行料として50ドルを支払うよう命じました。

ボに着き、Gendemaへと国境を越えようとした時には150リベリア・ドルを要求されましたが、私は125ドルに値下げするよう交渉しました。150ドルは私達が持つ全財産だったからです。妻は泣いていました。どうすればいいのかわからなかったのです。皆空腹でした。

兵士達がシエラレオネとの国境に架かっている橋へと続く国境の扉を開けた時には、天国の入口が開くような気がしました。全く信じられませんでした。

シエラレオネ側の兵士が通ってよいと言ったので、私達はGendemaに入り、UNHCRに登録されました。私達は一時滞在キャンプで1ヶ月を過ごし、直に地面で眠りました。そこには約6千人いました。その後難民キャンプに入ることを許可された人の名前が呼ばれ始め、私の名前が呼ばれた時は本当に嬉しかったです。私達は2002年3月16日にここに到着しました。」

3. キャンプからキャンプへ：続く避難生活を生き抜く

リベリア国民の多くは当初、他の町に住む親戚の家や国内避難民のためのキャンプなど、国内の避難先を求めて移動する。最初は安全だった避難先に戦闘がだんだんと近づき、前線が間近に迫ってくると、人々は何度も避難を繰り返さなければならなくなる。1999年の紛争再発以降、多くの人がこうした避難生活を送っている。一部の人はギニアやシエラレオネ、コートジボワールとの国境を越えて避難し、現在では難民として生活している。

「私はロファ州のヴォインジャマに住んでいました。反政府軍が攻撃してきた時、私達は森へ逃げ、26人が同じ場所で1週間過ごしました。食糧はありませんでした。私達は2週間歩いて森を抜け、幹線道路にたどり着きました。1人の友達の助けを借りて、あるキャンプまで移動することができました。キャンプはモンロビアにあり、そこで私は仕事を探しました。ある晩、仕事から戻った私は巡回中の軍隊に襲われました。彼らは私から所持金のすべてと、時計、そして衣服を奪い去りました。翌日、彼らが戦闘の最前線に送るために若い男性を捕まえていたので、私はキャンプを出る決心をしました。こうして私は、家族と共にシエラレオネに避難することにしたのです。」

難民男性、27歳、Gerihun キャンプ

近隣国にあるいくつかの難民キャンプは混合キャンプとなっており、異なる国や民族に属する人々が寄り集まって暮らしている。一部は帰還民（以前難民だったが自分の国へ戻った人々）であり、その他は国内避難民や他国からの難民である。こうした状況の下では、異なるグループ間の緊張が高まりやすくなると同時に、受入国側とキャンプに住む人々との間の緊張が高まることもある。

リベリア国民はキャンプでの暮らしがどういうものかを知っている。彼らの多くが戦闘の一步先を行くために必死の努力をし、ひとつの場所から他へと逃げる際に、様々なキャンプに滞在するのである。キャンプ自体もたびたび攻撃や略奪の対象となっている。特に国内避難民がキャンプで安全な暮らしを送ることは難しい。

「このキャンプが2週間前に反政府軍の襲撃を受けた時、私は自分の家にいました。反政府軍は家から家へと移動しながら、あらゆるものを略奪して行きました。彼らは私に、金を出すよう迫りました。私は持っていた数千リベリア・ドルをすべて渡しました。私は家族と共にここにいたのですが、反政府軍は1週間居座ったあげく、マットレス、お金、ズボン、そして食糧など、すべてを奪って行きました。」

国内避難民の男性、30代半ば、Plumcor キャンプ

「私がこのキャンプにある自宅に戻ったとき、すべての物がなくなっていました。家から物を持ち去ったのが誰なのかはわかりませんが、何も残っていなかったのです。私は体調が悪かったのですが、食糧を買うお金がなかったのでお米の代わりにキャッサバを食べなければなりませんでした。」

国内避難民の女性、28才、Plumcor キャンプ

「ここに着いたとき、家のドアが開いていて、マットレスや衣類など、何もかもがなくなっていました。」

国内避難民の男性、30代半ば、Plumcor キャンプ

「反政府軍が家にやってきて、私達に危害を加えるつもりはないといいました。しかし彼らはお金、食糧、そして所持品のすべてを奪って行ったのです。彼らは家から家へと移動し、ジーンズや靴に至るまで、あらゆる物を略奪して行きました。キャンプの中のすべてが破壊しつくされてしまったのです。」

国内避難民の男性、Plumcor キャンプ

2003年の春、モンロビアの北側にある国内避難民キャンプで、人々が不安のあまり配給の食糧を拒否するという事態が生じた。彼らは食糧を持つことで兵士達から嫌がらせを受け、危険な目に遭うのを恐れていたのである。しかし現在食糧不足が非常に深刻で、ひどい栄養障害が起きているため、人々は半分もしくはそれ以上を軍隊に与えなければならぬのを承知の上で、配給の食糧を受け取るというリスクをあえて冒している。

「MSFの診療所に行くと、スタッフからマラリアの錠剤を渡され、食後に飲むようにと言われました。でも私には食べるものがありません。」

国内避難民、Plumcor キャンプ

キャンプの中でも、**個人の身の安全は保障されていない**。難民・国内避難民キャンプで暮らす人々は、弱肉強食の法則が支配する世界で無防備な状態に置かれることがよくある。最も弱い人々は、性的搾取や暴力など様々な形の搾取の被害者になる可能性がある。

「一昨日(2003年6月21日)、私は薪を探しに森へ行きました。そこには銃を持った政府軍

兵士が3人いました。その1人が私を見て、「どこに行くんだ？」と尋ねました。私は薪を探しているのだと答えました。すると彼は、「今日1日俺の言う通りにしろ」と言いました。私は大変恐怖を覚えました。彼は私を無理やり森の奥深くへ連れて行き、服を脱がせました。そして私をレイプしました。その後私が服を着ている間に、彼は私から50リベリア・ドルを奪いました。昨日キャンプに帰ってきましたが、昨日はとても体調が悪かったです。ひどい腹痛がしますが、治療を受けるお金はありません。」

国内避難民の女性、27歳、Seigbeh キャンプ

難民が比較的安全な環境で暮らしている場合でも、**キャンプでの生活は常に過酷である**。人々は疲労困憊し、栄養不足となり、精神的な傷を負ってキャンプに到着する。多くの場合、難民は働き口もなく社会活動もほとんどないキャンプで数年暮らさなければならず、人道援助に依存することになる。

キャンプの食糧は不足している。どこのキャンプでもたいがい食糧の配給は月に1度で、食糧配給カードを持っている者だけが配給を受けることができる。難民や国内避難民は、正式に登録された場合だけ、このカードを手に入れることができる。たくさんの人が登録を受けずにキャンプへやってくる。

「毎日、キャンプには新しい人々が到着します。彼らは歩いてやってきます。国境から来る人もいれば、家族を探しに来る人もいます。UNHCRが難民認定の手続きに来た際、徒歩で到着した人の多くは認定から除外されてしまいました。認定されなかったのは、彼らが難民であることを係官が信じなかったためです。しかし彼らは今ここにいます。そして登録はされていません。つまりそれは、彼らが食糧配給カードを持っておらず、配給がある場合にも食糧を受け取ることができないということを意味します。そのため他の難民が彼らと食糧を分け合うことになるのです。」

難民女性、49才、Gerihun キャンプ

「キャンプでの暮らしは厳しいものです。食糧の問題が最も深刻です。私は通過ポイントの存在を知らなかったのが、直接ここにやってきました。難民登録もしていないし、食糧配給カードも持っていません。私は他の難民のために働いて、食糧を得ています。難民認定にも行ったのですが、登録の許可はありませんでした。」

難民女性、26才、Gerihun キャンプ

「キャンプでの生活環境は余りにも過酷です。食糧は十分ではありません。私は自分の配給カードで 16 人を養わなければなりません。私に食糧をくれと頼む人がいるのです。彼らは登録されていないために、食糧を得ることができないのです。」

難民男性、27 歳、Gerihun キャンプ

食糧難にも関わらず、難民達は配給された食糧の一部を売ることがある。他の基本的な物資が不足しているためである。移動の途中、道に設けられたバリケードを通過するために、多くの人がすべての所持品を様々な武装勢力に渡してしまう。キャンプに到着した時、持ち物は身につけている衣服だけ、ということがよくある。そのため食べ物はいばしば、靴や防水シート、鍋類など他の物を買うお金と交換されるのである。

トイレの不足、住居問題、不十分な教育、情報の不足などは、様々なキャンプで人々が日常的に抱えている他の問題の中の、ほんの一部に過ぎない。

「キャンプには十分な数のトイレがありません。私達はいつも川へ行くのですが、雨の日は川へ行くのが大変なため、人々がそこらじゅうで用を足します。小屋と小屋の間に排泄物があります。」

難民女性、49 才、Gerihun

「父はいばらくお腹の調子が悪かったのですが、私達がここに帰った時、病状が悪化して死んでしまいました。その時、診療所は閉鎖されていました。妻は先週、自宅で出産しなければなりませんでした。手助けをしてくれたのは、近所に住んでいる数人だけでした。」

国内避難民の夫婦、Plumcor キャンプ

「このキャンプに来てから、私は家を建てられずにいます。住居用の木を切ってくれる夫がここにいないためです。この 1 年間は、キャンプ内の一時滞在所で暮らしています。お金を稼ぐためには、木を切り、キャッサバの葉を集めて売らなければなりません。それが一緒に暮らしている子ども達に食べ物を与える唯一の方法なのです。もし私が薪を割らなければ、子ども達は誰一人、食べ物を手に入れることができません。私は現在妊娠 5 ヶ月なので、この仕事をするのはとても大変です。」

国内避難民の女性、42 才、Plumcor キャンプ

避難の途中で、もっとも身近な人々と離れ離れになってしまうこともある。キャンプには親の

いない子ども達が暮らしており、夫を後に残して来ている女性も多い。彼らは、家族が戦闘で生き残ったのかどうか、また現在無事であるのかどうか、知ることができない。赤十字国際委員会（ICRC）の追跡プログラムを通じて、離れた家族と連絡を取ろうとする人々もいる。しかし、リベリアの多くの地域がアクセス不可能となっているため、この努力も無駄に終わることが多い。家族の安否についての不安感は、避難民にさらなるストレスとトラウマを与えている。

「私の兄弟も、姉妹もこのキャンプにはいません。夫は現在もリベリアのどこかにいますが、正確な場所はわかりません。連絡をとる手段がないのです。」

難民女性、20代半ば、Jimmi Bagbo キャンプ

「僕は姉とふたりきりでここへ来ました。姉は19歳です。ふたりとも両親と離れてとてもつらい思いをしています。両親は、遠くモンロビアにいます。僕は赤十字を通じて両親にメッセージを送りました。」

難民の少年、14才、Gerihun キャンプ

「私はひとりぼっちです。一緒にいてくれる家族が誰もいないので、心細いです。このキャンプには友達もいません。私は洗濯をし、木を切り、畑を耕しています。」

難民女性、26才、Gerihun キャンプ

家族と離れたり、過酷な生活環境で長く暮らしたり、よりよい未来への希望が持てないということが積み重なると、絶望的な気分になることがある。ある難民はこう語った。

「キャンプでの暮らしが私達に精神的ダメージを与えます。過去に受けた心の傷がさらにひどくなってしまいます。」

難民の教師、27才、Gerihun キャンプ

26歳のジョゼフィーヌはシエラレオネの Gerihun キャンプで暮らすリベリア人である。MSFは2003年6月9日、彼女に話を聞いた。

「私はボミ・ヒルズから来ました。家族と暮らしていましたが、今は離れ離れです。故郷では学校に通っていました。家族や友達に囲まれた幸せな暮らしでした。2001年の5月、ボミ・ヒルズで戦闘が起こりました。本格的な攻撃があり、皆が森へ逃げました。私はそこに3日間いまし

た。子ども達は森で死んでいきました。空腹で、病気になる人もいました。父は死にました。

兵士達が私と友達を捕まえましたが、そのうち4人だけが逃げ出すことに成功しました。逃げ出す前の晩は、兵士達と一緒にでした。彼らは若く、20歳前後でした。混乱が起きた瞬間に私達は逃げ出しました。彼らは銃で撃ってきましたが、私達を捕まえることはできませんでした。私達は森へ逃げました。私はそこに3日間いて、それから他の人達と一緒に Singe まで歩きました。キャッサバを食べて1週間歩きました。食べ物がなく、空腹のまま寝たこともありました。Singe に着いた時、私達は60人以上になっていました。それから1週間待って、さらに10人と合流しました。私達は歩いて行ったので、リベリアの兵士達にお金を払わなければなりません。私は30リベリアドルを支払いました。お金がない場合は、衣服など何か他のものを取られます。そうしなければ、国境を渡ることはできないのです。

国境の反対側にいたシエラレオネの軍隊は親切でした。彼らは私達の荷物を調べ、何か武器を持っていないか確認しました。最初、私達はキャンプへは行きませんでした。私は2ヶ月間国境の近くで過ごしました。私はその国境からこのキャンプへ来ました。ここへ来るための旅費を稼ぐために、2ヶ月間働かなければなりません。以前はお金がなかったので、ここまで来ることができなかったのです。」

4. まとめ

世界の注目は主として、最近起きたモンロビアの危機と、政権をめぐる駆け引きに集まっている。MSFはこの報告書を通じて、普通のリベリア人が日常生活で直面している状況がより多くの人に理解されることを望んでいる。彼らの話は、この国のあらゆる場所で彼らが経験した、甚だしい苦痛を証言するものである。

紛争当事者が、一般市民の基本的な人権を尊重するという義務を果たさない限り、リベリア国民の苦難は続く。

序文で述べたように、紛争当事者は以下のことをなすべきである。

- いかなる状況においても一般市民を人道的に扱い、無差別の殺戮、性暴力、略奪、強制徴兵をやめ、
- 生きるために必要な食糧や医療などの基本的サービスおよび生活必需品を、一般市民が安全に入手できるようにし、

- リベリアの全ての地域で、人道援助団体が安全に一般市民への援助を行えるようにし、
- すべてのリベリア国民が国外へ出る権利を保証すること。

また、リベリア難民を受け入れる国の政府は以下を実施する必要がある。

- 国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の支援とともに、リベリア難民に対し引き続き保護と援助を提供し、
- 安全を求めて国外脱出をはかるリベリア人に対し、国境を開放すること。

エイブラヒムは 60 歳である。MSF は 2002 年 8 月、ギニアの Tekoulo 一時滞在キャンプで彼に話を聞いた。

「私は Kolahun 出身の農夫です。私の話は 2 年前の 2000 年 9 月、住んでいた村が政府軍の攻撃にあい、家族と一緒に Kolahun を離れなければならなくなったところから始まります。私達家族は他の村人と一緒に、森の中で 3 ヶ月間暮らしました。村人の中には荷物をモンロビアに運ぶため、政府軍に雇われたものもいました。

2001 年 1 月、LURD が Kolahun と Foya をふたたび制圧しました。私達は Kolahun に戻ることに決め、ふたたびそこでの暮らしを始めました。私は 6 ヶ月間働きました。2001 年 6 月、政府軍が再び Kolahun を攻撃しました。私は家族と共に Nyewoeleahun(森の中の村)に逃げ、1 週間そこに留まりました。LURD が Kolahun を取り返すのに 1 週間を要したためです。1 週間後、私達は Kolahun に戻り、私はそれからさらに 6 ヶ月間働きました。

2001 年 12 月 10 日、政府軍による新たな攻撃が近々行われるという噂が流れました。人々は再度村から離れ出し、多くの人が森にあるもうひとつの村、N'gokohun へ行きました。結局、私達も他の人々と同様そこへ行き、4 日間過ごしました。その間に政府軍が村に到着し、攻撃をしかけて火を放ち、村は全焼してしまいました。村人や避難してきた人のうち、14 人が死にました。翌日 LURD が再度攻撃し、私達は Kolahun に戻ることができました。

12 月 19 日、Kolahun は政府軍の 4 つの部隊に包囲され、戦闘が夕方の 4 時から朝の 8 時まで続きました。政府軍は LURD の反撃により撤退しましたが、12 月 23 日にまた同じ作戦で戻ってきました。LURD の反撃は 12 月 25 日まで続きました。この間、町が軍隊に取り囲まれていたため、私達家族は町から逃げることはできませんでした。12 月 25 日、弾薬が不足してきた LURD

は、人々に町から逃げるよう告げました。人々を町から脱出させるため、LURD が車に自動小銃を装備して、人々の通る道を開けてくれました。こうして私達家族は Kolahun を脱出し、Honiahun へ行くことができたのです。12月27日、LURD が再び Kolahun を制圧したので、私達は町へ戻ることができました。最後の戦闘ではたくさんの犠牲者がでました。500人以上が死にました。12月29日、人々はLURDに狩り出され、路上の遺体を集めて燃やす作業をしました。この作業には2週間かかりました。

2002年1月、新しい年が始まり、通常の生活に戻ったかのように思えました。この状態はふたたび6ヶ月間続きました。6月8日の2時に、ロケット弾がKolahunの近くで爆発しました。戦闘は午後の2時から5時まで続きました。2つめのロケット弾が町に投下されました。その時LURDの兵士の大多数は、商売を始めるためのコーヒーを集めに近くの村へ出かけており、町を留守にしていました。Kolahunは政府軍に再度支配され、人々はまたもや逃げ出しました。私は家族をKanelaに残し、何も食わずに3日間を森で過ごしました。

6月の半ばに、私は家族と一緒にヴォインジャマへ避難しようと決めました。そこへたどり着くために、私達は昼間隠れて休息をとりながら、3晩の間歩き続けました。町にはLURDが駐留していました。6月28日、政府軍が町を攻撃しましたが、町の中へ入ることはできませんでした。LURDは人々に、町に留まるよう告げました。2002年7月5日、政府軍が再度町に侵攻しようとしたが、やはり失敗に終わりました。LURDは人々が町を出るのを許可しませんでした。町を出るには2万5千リベリアドルを支払い、通行許可証を手に入れる必要がありました。

添付1 リベリア地図：別紙

添付2 この地域におけるMSFの活動

MSFは西アフリカで17年以上にわたる活動を続けており、地元の診療所や病院の支援、医療へのアクセス向上、コレラや黄熱病といった伝染病への対応、国内避難民を含む不安定な状況にある人々への援助を行っている。

リベリアでの戦闘が激しさを増し、戦闘が迫るのを目の当たりにした何千もの人々が避難を始めると、MSFは近隣国の難民キャンプやリベリア国内の避難民キャンプでの医療サービスを強化し、対応にあたった。

リベリアでの活動

MSFは1990年からリベリアで活動を行っている。1990年代に8年続いた内戦の間もリベリア国内に留まり、病院や診療所で不安定な生活を送る人々への医療サービスを提供し続けた。

1999年、第2次リベリア内戦の最初の攻撃がロファ地方北部で行われた際も、MSFはそれまでのプログラムを継続すると共に、「国内避難民」(故郷を離れ国内の他の場所へ移動することを余儀なくされた戦災者)キャンプでの援助活動を強化した。

モンロビア

MSFはモンロビアの貧困地区に重点を置き、リデンプション病院と7つの診療所で活動を行ってきた。

2003年6月に行われた攻撃によってリデンプション病院が一時閉鎖に追い込まれた後、MSFはマンバ岬地区に2つの入院施設を開設した。さらにMSFは最近のコレラの流行に対処するため、コレラの治療施設を特別に設置した。

MSFはまた、モンロビアのすぐ北側、モンセラード州に9つあるキャンプのうち3つでも活動を行っている。安全が確保できないために、2003年3月以降人々は食糧を受け取っていないので、MSFはこれらのキャンプでの深刻な栄養障害の対応に力を注いでいる。

ボン州

2002年6月、ボン州(リベリア中央部)のバルンガで起こった戦闘に続き、MSFはマイムにあるキャンプでの援助を開始した。MSFチームは診療所を運営し、衛生設備を整え、住居を建設し、水を供給し、妊産婦の健康管理を行った。このキャンプの人口は、およそ4万人である。

この州ではいまだ不安定な状況が続いており、安全度に応じて新しいキャンプの開設や、既設キャンプの移動が行われている。

ニンバ州およびグランド・ゲデ州

2002年11月、コートジボワール国境に近いリベリア東部で新たな戦闘が開始され、内戦の状況はさらに悪化した。11月下旬から12月上旬にかけ、リベリア東部のニンバ州およびグランド・ゲデ州で7万5千人近い人々が避難した。

MSFはコートジボワールとの国境に近い国内避難民のための一時滞在キャンプと、ニンバ州のトウェタウン、グランド・ゲデ州のズウェドル、そしてメリーランド州のハーパーで活動を行った。トウェタウン・キャンプは2003年2月に反政府勢力の新しい派閥、MODELの襲撃を受け、

立ち退きを余儀なくされた。キャンプで暮らしていた人々は森へ逃げた。アドラ(ADRA: Adventist Development and Relief Agency)の援助スタッフ3名が命を落とし、すべての人道援助組織が引きあげたため、グランド・ゲデ州全域が援助から切り離されることとなった。

MSF が診療所を建設し、給水設備を整え、はしかの予防接種を行っていたズウェドルは3月の末に攻撃を受けた。一時滞在キャンプに暮らしていた5千人(その一部はほんの1ヶ月前にトウェタウンから逃れてきた人々である)が避難したが、彼らとの連絡はそれ以降途絶えている。ズウェドルのMSF チームも、他の人道援助団体のメンバーとともに、コートジボワール国境から国外への危険な脱出を余儀なくされた。

反政府勢力の進攻により、Loguato 国境検問所の近くにある Karamblay でのMSF の活動もまた、中止に追い込まれた。6千人が暮らす一時滞在キャンプでは、MSF は野外診療所を設置し、はしかの予防接種を行い、水をトラックで運び、トイレを建設していた。リベリアとコートジボワールの国境南部では、2つの移動診療チームが12ヶ所で、主に難民と帰還民を対象として医療を提供していた。Seclepiea では、MSF が中心となって医療と食糧の提供を行っていた。

しかし現在、安全上の理由から、リベリアでのMSF の活動はモンロビアとその周辺の狭い地域に限定されている。

シエラレオネ、ギニア、コートジボワールでのリベリア難民の支援

MSF は自国から逃れてきたリベリア人のため、隣国のギニア、コートジボワール、シエラレオネに設置されたキャンプでも活動を行っている。

シエラレオネ

MSF はボ、ブジュハン、ケネマの各地区のキャンプで活動している。これらのキャンプの大部分は、もともとシエラレオネ内戦(1991-2001)の間に故郷から避難してきたシエラレオネの人々が住んでいたものである。2002年からはその同じキャンプに、リベリアから来た難民が暮らしている。MSF はジェンベ、バンダジュマ、Jimmi Bagbo、Gerihun、Gondama、Taiama、Tobanda の7ヶ所のキャンプに暮らす人々の健康管理を担当している。それぞれのキャンプには、5~8千人の人々が暮らしている。ジェンベ・キャンプでの水や衛生設備の供給もMSF が行っている。

2002年2月より、MSF は Gendema にあるシエラレオネとリベリアの国境検問所で、難民の状況を観察し、さらにリベリア難民が流入する可能性があるか調査している。

MSF はズィンミの一時滞在所と、この地域にある3つの診療所での支援を行い、リベリアからの難民の健康状態を注意深く見守っている。

ギニア

ギニアにおける活動は、数年間この国に住み続けている難民への対応に中心が置かれてきた。リベリアでの戦闘が激化したとき、MSF チームは予め国境近くに入って、マセンタ、ゼレコレ、ゲケドゥ、キシドゥグ、Albadaria の各地で援助活動を行うことができるよう体制を整えた。MSF は現在、Tekoulo 一時滞在所や Boréah、Lene、Nona、Kouankan などのキャンプで、医療や給水・衛生設備面での援助を行っている。

コートジボワール

MSF は 2003 年春に起こった攻撃の後、メリーランド州から避難してきた難民が暮らすタブー・キャンプで活動を行っている。